当財団は、2011年４月より、財団法人中部空港調査会（2011年３月解散）から航空・空港に関する調査研究事業を引き継いで、中部圏の航空・空港の発展に資する調査研究・普及啓発に取り組んでおります。

近年、世界の航空自由化・オープンスカイの進展とともに、規制緩和による自由化やＬＣＣと呼ばれる格安航空会社の台頭など、日本の航空を取り巻く環境は劇的に変化しており、地域における空港のあり方も大きく変革してきています。

中部圏に立地する８空港（中部国際空港、松本空港、富山空港、能登空港、小松空港、静岡空港、名古屋空港、福井空港）について、その歩みや現状を関係者のインタビューを交えて紹介します。

第６回となる今回は、小松空港です。

第６回　小松空港
－日本海側最大の拠点空港として発展－

空から見た小松空港　　出典：国土交通省大阪航空局小松空港事務所

１．概要と沿革

（１）北陸の航空拠点

小松空港の前身は、戦時中の1944年に整備された海軍小松飛行場である。終戦直後から1958年まで米軍に接収され、その間に大阪便、名古屋便、名古屋経由東京便の３路線が不定運航されている。米軍接収解除から３年後の1961年６月、航空自衛隊小松基地が開庁し、同時にターミナルビルが運用開始した。そして同年12月、航空法に基づく「公共の施設」として告示され、正式に自衛隊と民間航空による共用飛行場となった。一般的には

「小松空港」の名称で知られているが、正式名称は現在も「小松飛行場」であり、管理者は防衛大臣となっている。

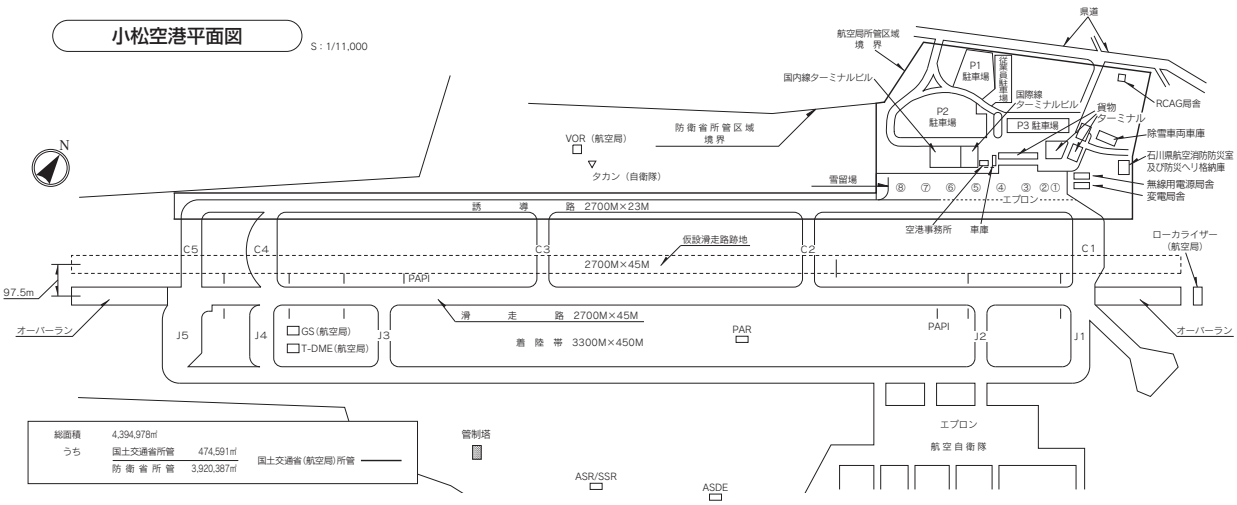
所在地は石川県南部の中心都市、小松市である。空港の約１㎞先には日本海が広がり、東側には標高2,702メートルの霊峰「白山」と白山山系の山並みが連なる。県都であり北陸を代表する観光地でもある金沢市からは南西約30㎞の位置にあり、県下に定期便の就航する空港がない福井県にも近い小松空港は、国際線、国際貨物定期便も就航している北陸地方の「空の玄関口」であり、国内有数の乗降客数と国際貨物取扱高となっている。北陸地方のみならず、日本海側で第一位の空港である。

（２）自衛隊との共用空港

日本の空港は、空港法によって４種に分類される。拠点空港（成田・東京・中部・関西・大阪の各国際空港をはじめ28空港）、地方管理空港（54空港。うち中部地方では富山・能登・福井・松本・静岡の各空港）、その他の空港（2005年に国土交通省から愛知県に施設管理が移管された名古屋飛行場＝県営名古屋空港など７空港）、共用空港の４種類で、小松空港は「共用空港」である。

共用空港とは、自衛隊が設置する空港または在日米軍が使用する飛行場のうち、民間空港の機能も果たす空港のことで、小松のほかには札幌飛行場（丘珠空港）、千歳飛行場（新千歳空港に隣接）、三沢飛行場（三沢空港）、百里飛行場（茨城空港）、美保飛行場（米子空港）、徳島飛行場（徳島空港）、岩国飛行場（岩国錦帯橋空港）がある。

自衛隊小松基地は近隣諸国まで航空機で１時間という距離の近さから、国防上の拠点としても重要視されている。日本海側唯一の戦闘機部隊である「第６航空団」が対領空侵犯措置の任務を与えられ、主に日本海正面における国籍不明機の警戒にあたる。また、冬季における飛行場の除雪を担う「中部航空施設隊第２作業隊」のほか、「小松



空から見た小松空港

小松空港平面図・写真　　出典：石川県企画振興部空港企画課

救難隊」、「小松管制隊」、「小松気象隊」、「小松地方警務隊」の各部隊がある。

小松空港の総面積4,397,259㎡のうち、滑走路を含む約９割が防衛省の管理であり、国土交通省の管理面積は、ターミナルビル、駐車場、エプロン、誘導路など全体の約１割にとどまっている。基本施設としては、滑走路は１本で長さ2,700ｍ・幅45ｍ、並行誘導路は長さ2,700ｍ・幅23ｍ、エプロン（駐機場）は49,240㎡で大型ジェット用５バース、中型ジェット用１バース、小型機用２バースが整備されている。

（３）交通アクセス

道路アクセスは、北陸自動車道の小松インターチェンジが最寄りで、ターミナルビルまでの距離は約3.5㎞と利便性は高い。また、片山津インターチェンジからも約6.5㎞と近い。さらに2008年３月には空港から約３㎞の位置にある安宅パーキングエリアにスマートインターチェンジも開設されたため、自動車による所要時間は、金沢市から約35分、福井市から約50分となっている。

駐車場は、第１駐車場～第３駐車場に合計1,723台分収容できる。また、空港の周辺には、国際線利用者および乗り継ぎでの国際線利用者専用の無料駐車場が658台分ある。

鉄道利用の場合、ＪＲ小松駅から路線バス（260円）を利用して約12分で、毎時２～４本のバスが運行している。このほか、ＪＲ金沢駅、ＪＲ福井駅、ＪＲ加賀温泉駅からの連絡バスもある。

（４）国際便の定期運航

1973年に、小松商工会議所によりジェット機就航を記念して初の国際チャーター便となる香港へのチャーター便が企画された。1970年代は海外旅行ブームを受けてチャーター便も年々増加し、1979年にはこれまで最高の113便が運航された。

チャーター便の増加とともに国際線化への動きも活発となり、1978年には小松空港国際化促進協議会が設立され、1979年にはターミナルビル内に検疫施設が開所された。同年12月に、日本航空が初の国際定期便として新潟－小松－ソウル便を週２往復で就航させた。さらに、1984年には国際線新旅客ターミナルビルが竣工、国際空港としての形を整えた。また、2013年８月末には、複数便に同時に対応できる旅客搭乗橋（パッセンジャー・ボーディング・ブリッジ）の増設をはじめ、出発ロビー、到着ロビーの拡充、旅客手荷物ベルトコンベアの延長や保安検査機器の増設、免税売店の充実など利便性の向上を図っている。

その後定期旅客便はソウル便のみだったが、2004年には上海便が、2008年には台北便が、それぞれ週２往復で就航した。現在は、台北便が毎日、ソウル便と上海便が週４便就航しており、2007年度以降利用客は４年連続で増加している。

また、1994年には、カーゴルックス社（本社：ルクセンブルク）が、東京・大阪・名古屋といった大消費地への接続に有利なことに着目してルクセンブルクへの国際貨物定期便の運航を開始した。それまで福岡への定期便として就航していたが、

小松空港ターミナルビル　出典：石川県企画振興部空港企画課

エプロン　出典：石川県企画振興部空港企画課

貨物を大消費地にうまく転送できなかったため、小松空港に移転したものである。これは、自衛隊基地のある空港へ初めて海外エアラインの定期便が乗り入れたことでも注目を集めた。

（5）地域拠点として活用されるターミナルビル

ターミナルビルは、北陸エアターミナルビル株式会社が運営している。現在のターミナルビルは、国内線部分は1981年に使用を開始し、その後何度か増改築を行った。国際線部分は、1984年に使用を開始し1995年、2013年に増改築が行われている。

ターミナルビルには、飲食・物販施設として、6つのレストラン7つの売店（直轄を含む）がある。北陸の玄関口を担うというこの空港の性格上、石川県を中心に北陸3県の商品を取り扱っている。石川県には36種もの伝統工芸品があり、すべてではないがそれらを幅広く取り扱っているほか、ビル1階に2010年に設置された「小松空港ほっとプラザ北陸」でも代表的な伝統工芸品や北陸の四季を描いた九谷焼の陶板が展示されており、石川県の多彩な伝統産業を概観することができる。

空港のある小松市では、近年、ＪＲ小松駅前にあったコマツの工場の移転や百貨店の閉鎖などが相次いだ。北陸エアターミナルビル株式会社は、小松空港をコミュニティー拠点施設として活用すべきとの認識から、館内イベントの実施や季節ごとの臨時売店の設置、隣接する航空プラザのイベントへの参加、仮設滑走路跡地を利用した「ラン＆ウォーク大会」の実施など、さまざまな取り組みを行っている。

（6）石川県立航空プラザ

石川県立航空プラザは、1995年11月27日に開設された航空機および航空を主体にした博物館で、小松市安宅新町にあり、小松空港の北側に位置している。日本海側では唯一の航空博物館である。

施設設置者は石川県、施設管理者は小松市、施設指定管理者は財団法人小松市施設管理公社である。入館料は無料（一部のシミュレーション装置は有料）で、屋外および1階には南極観測で活躍したスイス製のピラタスをはじめ、人力飛行機、ヘリコプター、ハイテクジェット機などが展示されている。一部には実際に乗ることもでき、YS-11のシミュレーターや航空管制シミュレーターも体験することができる。2階には、航空機の歴史や構造について模型などが展示されている。

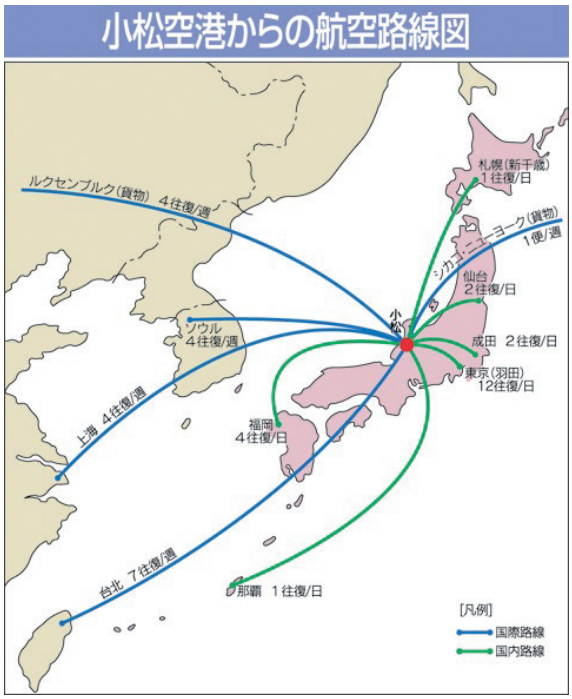
2．現況と課題

（1）利用状況

国内線は、羽田便の1日12往復を中心に、福岡便（4往復／日）、成田便、仙台便（各2往復／日）、札幌便、那覇便（各1往復／日）が就航している。2012年度は、国内定期便利用者のうち82.4％が羽田便で、圧倒的シェアを占めている。ただし、利用者（チャーター便含む）は、2002年度に2,588,830人であったが、2012年度には2,025,428人に減少している。

国際線旅客便は、ソウル便、上海便が各週4便、台北便は毎日運航されている。ソウル便のみの就航だった2002年度の利用者数は46,638人だったが、2012年度には3路線合計で144,074人が利用した。なかでも台北便は好調で、開設された2008年の利用者数18,772人が、2012年度には64,212人に伸び、利用率は72.9％と3路線で最も高い。台湾便は、それまで週5往復だったが2012年12月から毎日運航に増便された。

1973年11月、香港へ最初の国際チャーター便を運航させたのをかわきりに、1991年4月には外国航空会社として初めてシンガポール航空が乗り入れている。実績としては、2012年度に20往復7,067



小松空港からの航空路線図　出典：石川県企画振興部空港企画課

人となっている。

ルクセンブルクへ週４便の定期便がある国際貨物便は、2004年をピークとして近年は減少傾向にあるものの、国際貨物取扱量は全国７位で上位に位置している。2011年には北米（シカゴ・ニューヨーク）経由便が増設されており、利用者のさらなる掘り起こしが期待されている。

（２）北陸新幹線開通による影響と対策

2015年春に金沢まで北陸新幹線が開通することによって、小松空港にも影響が及ぶことが予想される。特に、利用者の８割を占める羽田便は現在の１日12往復から減便される可能性があり、その対応が最大の課題といえる。

北陸新幹線開業を見据え、2011年度に小松空港活性化推進検討会が策定した「小松空港活性化アクションプラン」では、さまざまな羽田便対策を打ち出している。なかでも、羽田の乗り継ぎ需要を拡大すべく、石川県が中心となり、2012年８月に全国の135の自治体などと共同で「航空乗継利用促進協議会」を発足させ、ＰＲに努めている。現在、羽田乗継割引運賃が設定されている区間は35区間（2013年９月時点）にのぼっている。また、新幹線との競争が可能となる料金、スケジュールや機材を小型化して便数を確保する方策なども検討されている。アクションプランでは、新幹線開通の影響をあまり受けない福井県も含めた広域での連携や南加賀地域への観光客誘致の推進により、小松空港の利用者増加につなげることも対策のひとつに挙げられている。北陸新幹線の開通により北陸全域が脚光を浴びる効果を最大限に利用して、新幹線と航空の双方を活用した広域的な周遊ができるように各観光地の活性化や魅力の増大、アクセス交通の整備などを進めている。

また、小松空港の国際化の促進を図ることも重要であり、近隣アジア諸国を中心に新たな路線の開拓を進めている。

（３）小松空港の物流拠点化と企業誘致

石川県は、建設機械、繊維機械、産業用機械など、製造業を中心とした第二次産業が盛んで、中小規模ながらも独自の技術や製品で全国シェアを誇る「ニッチトップ」といわれる企業も多い。これらの企業にとって、小松空港は物流基地としての価値が高い。小松市内には小松空港から3.5kmの小松工業団地、５kmの串工業団地、７kmの南部工業団地があり、20km圏内では７つの工業団地が

羽田乗継割引運賃設定区間　（2013年９月１日現在）

航空会社	区間数	乗継先
ＡＮＡ／ＪＡＬ	21区間	新千歳、旭川、釧路、函館、帯広、秋田、岡山、広島、山口宇部徳島、高松、松山、高知、北九州、大分、熊本、長崎、宮崎、鹿児島、那覇、石垣
ＡＮＡのみ	８区間	稚内、中標津、大館能代、庄内、岩国、鳥取、米子、佐賀
ＪＡＬのみ	６区間	女満別、青森、三沢、山形、出雲、福岡
計35区間（重複除く）		

分譲中である。なかでも、能美市の「いしかわサイエンスパーク」は北陸先端科学技術大学院大学を核とした先端的研究開発拠点として注目を集めており、小松空港から16kmという近さや地震の発生頻度が全国的に大変低く、セールスポイントのひとつとなっている。こうした状況から、前述の「小松空港活性化アクションプラン」では、主要項目に小松空港の物流拠点化に向けた対策を挙げて、「小松空港就航便の定着・増便に向けた利用促進」、「ネットワークの拡充」、「助成制度の見直し」の3項目を打ち出している。

小松空港の約30km北東には金沢港があり、こちらは近年、コンテナの取扱量や航路数が増加傾向にある。空港や港の至近に高速道路も通じており、こうしたインフラ環境のよさは企業にとって魅力的である。その利便性をアピールすることにより航空貨物の増加にもつながると考えられる。

3．インタビュー

今回は、大阪航空局小松空港事務所長　松本茂美氏、北陸地方整備局金沢港湾・空港整備事務所長杉村佳寿氏、石川県企画振興部次長　浅井俊隆氏（2013年７月29日付けで内閣府地方分権改革推進室企画員）、北陸エアターミナルビル株式会社代表取締役社長　岡田靖弘氏の４人にお話をお伺いしました。

国土交通省　大阪航空局小松空港事務所
所長　松本　茂美氏
プロフィール
1980年　運輸省（現国土交通省）入省
2007年　大阪航空局　関西空港事務所
　　次席航空管制技術官
2010年　航空局　那覇航空交通管制部
　　次席航空管制技術官
2012年　大阪航空局　広島空港事務所
　　先任航空管制技術官
2013年　現職

国土交通省　北陸地方整備局金沢港湾・空港整備事務所
所長　杉村　佳寿氏
プロフィール
1999年　運輸省（現国土交通省）入省
2001年　河川局
2002年　国土技術政策総合研究所　研究官・主任研究官
2006年　中国地方整備局　港湾空港部　港湾計画課長
2009年　中国地方整備局　港湾空港部　沿岸域管理官
2010年　環境省大臣官房　リサイクル推進室室長補佐
2012年　現職

石川県企画振興部
次長　浅井　俊隆氏
プロフィール
1996年　運輸省（現国土交通省）入省
　　総合政策局交通調査統計課調査室課長補佐、
　　航空局環境整備課課長補佐、
　　国土交通大臣政務官秘書官、
　　総合政策局総務課課長補佐、
　　総合政策局総務課企画調整官等などを歴任
2010年８月　現職

北陸エアターミナルビル株式会社
代表取締役社長　岡田　靖弘氏
プロフィール
1968年　石川県庁入庁
1991年　企画開発部交通対策課長
1994年　企画開発部企画課長
1995年　企画開発部次長兼企画課長
1996年　企画開発部次長
1997年　石川県参事
2003年　商工労働部長
2005年　石川県退職
　　北陸エアターミナルビル㈱代表取締役専務
2012年　現職

共用空港として自衛隊と共存

－業務の概要についてお聞かせください。

岡田　北陸エアターミナルビル株式会社は、ターミナルビルを運営開始して今年で51年になります。国内線ターミナルビルは1981年の竣工で、1993年に日本航空株式会社が就航したのを受け増改築しています。

松本　大阪航空局小松空港事務所は、空港の整備と維持管理、航空機の運航・情報管理、航行援助施設等の維持管理などを行っています。降雪が多い地域ですので、冬場の除雪は特に重要な業務のひとつですが、共用空港ですので、滑走路は防衛省、取り付けおよび平行誘導路・エプロン・構内道路は小松空港事務所がそれぞれ作業担当区域を分割して、効率的に実施しています。

杉村　金沢港湾・空港整備事務所では、金沢港、七尾港、輪島港の港湾整備と小松空港の整備を担当しています。空港では、主に滑走路、誘導路の整備を行っており、予算や事業実施にあたっては大阪航空局と二人三脚で対応しています。

浅井　石川県は、県が設置管理者となっている能登空港の管理の他に、小松空港を含めた利用促進、利便性向上、地域振興などを行っており、県庁には空港担当を専門とする課として「空港企画課」を設置しています。担当職員が20名以上いますが、これは他県の空港関連部署と比べて規模が大きく、空港には非常に力を入れている県だと自負しています。

空港企画課では主にアウトバウンドを担っており、旅行商品やキャンペーン商品の支援、イベントやＣＭなどのＰＲ支援などを行うほか、既存路線の増便、利便性向上、新規路線開設などについては国内外の航空会社への働きかけも重要な責務です。

－共用空港での民間航空運用に関してお聞かせ下さい。

岡田　共用空港の利点のひとつは、滑走路などの主要部分の管理を自衛隊が担っていることです。ほとんどが防衛費で賄われるため、地元にかかる経費負担は少なくなっています。特に、除雪体制は国防の観点から万全です。直轄の除雪部隊を有しているのは心強いですね。しかし、新規路線を就航させる場合、自衛隊との調整に時間がかかるということもあります。

浅井　基地である以上、自衛隊と共存共栄することは大前提です。基地の運用に支障をきたすようなことはできないため制約は多いのですが、自衛隊も地元と共存していきたいという思いがあるので、さまざまな点で配慮や協力をいただいています。たとえば、外国のエアラインが乗り入れる場合の制約についても、10、20年前と比べるとずいぶん柔軟な対応をしていただけるようになったと感じています。

松本　私は、鳥取県の美保飛行場（米子空港）に勤務していたことがあります。当時は、訓練が始まるとなかなか入れてもらえなかったり待たされたりということがありました。しかし、最近ではそういう話はほとんど聞きません。自衛隊は除雪についても隊員を動員して、より性能の高い機材を使うことで、迅速に対応していただいています。今後も共存していきたいと考えています。

空港と地域との関わりのあり方

－企業誘致と空港の関わりなど、空港の利活用についてお話しいただけますか。

岡田　小松空港周辺の工業団地に、先日新たな企業が誘致されました。このほか小松市に隣接する能美市に「北陸先端科学技術大学院大学」がありますが、空港に近いことがこの地を選定した理由のひとつとも聞いています。企業はもちろん、人を集める拠点としても、小松空港は大きな手段になりうると思います。

杉村　小松市の周辺には精密機械をはじめとした工場が多く、企業にとって空港の存在は有利なのではないでしょうか。この空港の特徴のひとつは貨物の定期便が発着していることですし、企業にとってその重要性は認識されていると思います。

－交流や学習の場として空港の活用についてお話しいただけますか。

浅井　能登空港は「地域拠点としての空港」のモデル的存在ですが、小松空港もそうした空港になりつつあります。ターミナルビルで、絵画教室などのさまざまなイベントを行うなど、地元の人がちょっと立ち寄れるような場所になってきています。また、飛行機に親しんでもらう博物館「航空プラザ」が近くにあり、こちらも賑わいが生まれているようです。今後、地域の賑わいの場としての役割はますます重要になってくることは明らかで、より活用すべく努力していきたいです。

－最近、ＬＣＣの就航が増加していますが、それを踏まえた空港のあり方、路線誘致などに関してはいかがでしょうか。

浅井　国際線については定期便がありますので、現状ではＬＣＣに来てもらわないと困るということはありません。既存の路線を発展させていくことが第一です。国内線も、すでに主要な都市とは結ばれていますので、ＬＣＣを誘致するにしても、既存路線への影響をみながら考えなければなりません。ある意味、贅沢な悩みではありますね。

－支援組織、団体などの活動状況についてお話しいただけますか。

浅井　空港を支援する組織として、小松空港協議会、小松空港国際化推進協議会、小松空港国際化推進石川県議会議員連盟、小松市議会国際交流推進議員連盟などの団体があります。また福井空港では現在、国内外の定期路線が設定されていないことから、福井県にも協力していただいています。国と関係機関への要望などはこれらの団体が共同で行っており、総力戦といった感じです。

能登空港は、一般市民などによるサポーターズクラブで空港を盛り上げていただいておりますが、小松空港にはそうした組織がありません。早い時期から空港が存在していたこともあって、一般市民の利用促進運動などが広がらなかったからかもしれませんね。

－「民間の能力を活用した国管理空港等の運営等に関する法律」についてお話しいただけますか。

浅井　小松空港は、自衛隊との共用空港ですから、他の空港とは状況が違います。一般の空港が民間業者に運営委託されると、「本丸」である滑走路が一体で運用されますが、小松空港の場合は「本丸」以外の部分が対象となるので、どのような形で運営するのか、まだルールが定まっていないと思います。着陸料の設定権を委譲できるのかも不明ですし、そもそも国防上の観点からこの法律をそのまま適用させてよいのか、小松基地の意見を十分に聞く必要があります。まず、国で運用ルールを明確にしていただき、そのうえでの判断になると思います。

岡田　今回の法律は空港活性化の一つの方法であり、必ずしもこの法律を活用する必要はありません。北陸新幹線の開通を控え、空港の活性化について考える良いきっかけを与えてくれましが、共用空港である小松空港での活用は難しいのではないでしょうか。

防災拠点としての空港の役割

－昨年の東日本大震災で空港の役割が見直されています。小松空港の場合は共用空港ということで防災拠点、防災基地、避難場など位置づけが少し変わってくることも予想されますが、その点はいかがでしょうか。

岡田　空港から海岸までは２㎞弱と非常に近いのですが、海岸線に沿って海面から高さ５ｍのところに高速道路が通っており、10ｍ以上の津波でないと越えないので、今の想定では津波の影響はほとんどないと思われます。しかし、万一のことを考えて先日、小松市との間で災害時にはターミナルビルを避難場所とし、700人の地元住民を受け入れる旨の防災協定を締結しました。

浅井　地方空港は、災害時に外からのアクセスを維持する拠点としての役割を持っています。2007

年の能登半島地震では、能登空港の滑走路に少し亀裂が入ったのですが、すぐに復旧し翌日には空港が再開できたという実績があります。一方、道路はなかなか復旧しませんでした。そのような経験からも、県では空港の重要性を認識しています。

杉村　災害時には、当然ここは防災拠点になるでしょうね。地域の方々の安全を確保することや、復旧対策の拠点という意味でも重要な場所です。

松本　自治体、航空自衛隊が共同で、東南海地震や東海地震が発生した場合、小松基地へ医療関係者、救護隊員、緊急物資などを招集して現地へ派遣するという想定の訓練も定期的に行っています。

今後の主な課題

－2015年３月に北陸新幹線が開業予定です、その影響や取り組みについてお話しいただけますか。

浅井　現在、国内線の年間利用者数約200万人のうち、約160万人を羽田便が占めています。つまり、羽田便への影響は小松空港そのものに影響を与えます。新幹線開通後は、ＪＡＬとＡＮＡが運航する羽田便12本が減ることを前提に、それを何でカバーするかが問題です。方法は二つあります。ひとつは、減便の影響を抑えつつ、新幹線の影響を受けない需要を増やすことです。羽田便には現在は中・大型機を使用していますが、機材を小型化して便数をなるべく維持することを航空会社にお願いすることを考えています。金沢近辺の方は新幹線へ流れる人も多いと思われますが、県西部や福井県嶺北地方では、開通後も時間短縮効果はあまり大きくないため、引き続き飛行機を使う人が多いでしょう。ですから、福井県とも連携しつつ現在の利用者を定着させなければなりません。

もうひとつは、新幹線と競合しない既存路線の利用客を増やすことです。たとえば、羽田経由で青森や鹿児島へ行くといった、乗継需要を増やすことが一つの手段でしょう。ＪＡＬ、ＡＮＡとも乗継割引運賃制度を拡大しており、それを積極的にアピールしています。石川県が音頭を取り、全国141の自治体などが参加する「航空乗継利用促進協議会」も発足させています。

また、新幹線効果を取り込むことも大事です。新幹線で金沢まで来た人が加賀南部や福井県まで足を伸ばす可能性は高いので、「片道新幹線・片道飛行機」という方法もアピールしていきたいですね。そのためには、加賀南部や福井県も意外と近いな、行ってみたいな、と思っていただけるように、各地域の魅力を高めなければいけません。

－インバウンド客の誘致についてお話しいただけますか。

浅井　台北便の需要が伸びた２、３年前は、中部国際空港を組み合わせた流れが多くなりました。広範囲に移動する観光客を取り込んでいくのはとても大事です。中部国際空港だけでなく関西国際空港も組み合わせるなど、利用できるものは何でも利用すればいいのではないでしょうか。新幹線利用客を金沢から引っ張ってくるのもそうですが、国際航空旅客への積極的なＰＲが重要だと思います。そういう意味では、昇龍道プロジェクトは大きなきっかけになるのではないでしょうか。

岡田　2012年度に小松空港で実施したアンケートによると、台湾人観光客のうち日本へ５回以上来ている人は39％にのぼりました。日本はほとんど回ったので後は北陸しかない、という方が多いようです。そういう方々はだいたい４泊５日で、小松から入って金沢へ行き、立山連峰で雪を見て、大町から長野へと抜けるか、あるいは富山のあと郡上八幡や名古屋などを回っているようです。そういう回遊的な旅行実態があるので、昇龍道プロジェクトには非常に大きな期待感があります。

杉村　石川県の特徴は、高速道路があり、金沢港があり、小松空港があるというように、陸路、海路、空路、いずれも充実していることです。たとえば、金沢港から入って、小松空港から出るというようなパターンも考えられますね。

浅井　小松空港を「日本海側最大の拠点空港」として捉え、今後も積極的に振興を図っていきたいと考えています。

小松飛行場［通称：小松空港］概要（2013年９月現在）

位　　置	石川県小松市
空港種別	共用空港
設置管理者	防衛大臣
開港時期	開港　1944年11月（1961年12月20日 供用飛行場指定）
アクセス	http://www.komatsuairport.jp/komatsusypher/www/access/index.html 電　車　　ＪＲ西日本　小松駅（バス12分） バ　ス　　４路線　多便
供用時間	14時間（7：30〜21：30）
基本施設	面　積　　－ 滑走路　　2,700m×45m（06/24） 駐機場　　８バース（民航） 大型ジェット５バース　　中型ジェット１バース 小型機２バース
付帯施設	駐車場　　1,723台　有料
関係団体	小松空港協議会（石川県庁空港企画課内）
就航航空会社	国　内　　５社 国　際　　３社
就航便数	国　内　　22便（日） 国　際　　15便（週）
就航都市数	国　内　　６都市 国　際　　３都市
窓　　口	石川県企画振興部空港企画課 石川県金沢市鞍月1丁目1番地　　076－225－1337 http://www.pref.ishikawa.lg.jp/kuukou-k/ 北陸エアターミナルビル株式会社　総務課 石川県小松市浮柳町ヨ50番地先　　0761－23－6111
方針・戦略等	小松空港の国際化推進とポテンシャルを活かした拠点空港づくり
就航都市	国　際　　ソウル・上海・台北 国　内　　羽田・成田・札幌・仙台・福岡・那覇
就航航空会社	国　際　　大韓航空・中国東方航空・エバー航空 国　内　　日本航空・全日空・アイベックスエアラインズ・AIRDO・日本トランスオーシャン航空
そ　の　他	自衛隊との共用空港。 日本海側の拠点空港として利便性の向上、利用促進を図っている。 新しい空港利用の観点から羽田乗継で日本各地への路線網を形成。 アジア近隣諸国からの観光客誘致活動を積極的に取り組んでいる。 国際貨物便（週４便）が就航。 石川県が国際線利用者を対象とした小松空港国際線駐車場（658台・無料）を設置。